

酒場で

西川正浩

背中がこわい。

投げかけた声か体の奥深く落ちて行き、
沼の中へポチャリと音をたてて沈んで行く――。
そんな気がする。

それはやがて水底で得体のしれない生き物になって
体内を駆けめぐり、いつとは知れずヤミヤミな日常の
ある瞬間に無形の薄片となって吐きだされるのでは
ないか。

町中で無数の見知らぬ背をみるたびに異形の空想が
頭をかすめてゾツとする……

「……かなんナア、ほんまにイ。こんなところで吐いてもろたら
困りまんがな」

週末にもかかわらず客の少ない駅前居酒屋「夕映え」
で、いつも通り酔いつぶれたSの背をみながら、
ホウキと千リトリを手にも、果てもない考えに
引きまわされるのだった。

講評

内田百閒ふうの掌篇ですね。短いけれど、とても時間と労力をかけて書いた後がうかがえました。「得体のしれない生き物」がどんな姿で、どんな形となって吐き出され、吐き出された後にどんなことになるのか。そんな空想までさらに広げて書いてみると、もっとおどろおどろしく、かつ生々しいものになるかもしれませんね。

(選者・星野)